



発行：東京都老人総合研究所

INDEX

トピックス [活力ある生活に情報基盤は欠かせない!?!] ①

[国際百寿者研究会 in Hano Island] ③

[研究推進への道標・平成15年度外部研究評価について] ④

留学記 [カリフォルニアは広くて砂漠の国でした] ⑥

[科学研究費補助金の採択状況] ⑧



活力ある生活に情報基盤は欠かせない!?!

トピックス

ケータイ電話やパソコン利用など高齢者のIT事情

介護・生活基盤研究グループ 北川 博巳

はじめに

1990年代より携帯電話やインターネットの普及もあって、高度情報社会と言われるようになりました。携帯電話はいつでもどこでも使えるし、分からないことや知りたいことがあると、すぐにインターネットから調べられるようになり、使う人にとってはあって当たり前のような感覚になっています。その恩恵にあやかっている高齢者もいれば、関係なく生活している方もいます。また、デジタルデバイドと言われる、使いたくても使えない人がいる現実もあります。最近、街を歩いていると、携帯電話を使っている高齢の方を見かけるようになりました。パソコン利用もシニアネットなどの市民活動が活発化しているようです。元気高齢者が増える中、これら情報ツールに対する関心も増えるでしょうし、会社で頻りに携帯電話やインターネットを利用していた人にとっては、退職後の生活で抵抗なく利用することができるでしょうから、その人口も増えてくるでしょう。今回は常日頃携帯電話やパソコンを利用している比較的元素な高齢者の外出に関する情報に着目して、元気高齢者が必要とする外出情報について調べ、今後情報機器や提示する情報をどのような方向で整備してゆくのかについて調べた結果を報告します。なお、この研究は(株)フジタとの共同研究の

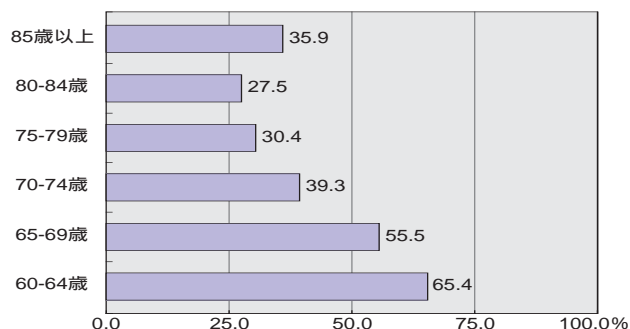
成果で(財)全国老人クラブ連合会の全面的な協力を得て実施したものです。

ケータイ・パソコンを保有する高齢者は?

平成13年に実施された内閣府の調査結果(「第5回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」)では、65歳以上の高齢者のうち「携帯電話やPHSで家族等と連絡をとる」と「パソコンのメールで連絡する」と答えた割合はそれぞれ13%強と3%弱という結果でした。しかしながら、パソコンを持っている高齢者の75%はインターネットを利用しており、その数は今後も増えてくるでしょう。

今回は全国老人クラブ連合会所属の6都道府県老連の

図1：今回の調査データによる年齢階層別携帯電話保有状況

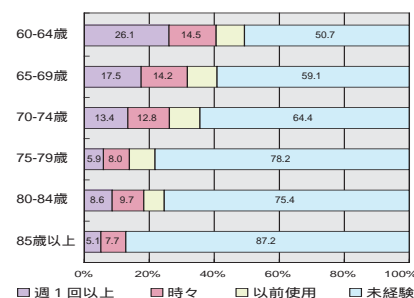


事務局の協力を得て、会員の中で携帯電話を保有していると判断された方々を対象としてアンケートを実施しました(アンケート票は2,000部回収できました)。このため、先ほどの内閣府の調査結果と比べますと、今回の調査結果は携帯電話やパソコンの保有率はかなり高めに出ていると考えられますが、65~74歳までの利用者がとくに目立っています(図1)。75歳以上の年齢層と比べると倍以上の割合となっており、現在の携帯電話利用者が高齢化することを考えれば、高齢の携帯電話利用者が今後急増すると考えられます。

パソコンを活用する高齢者は?

パソコンを「週1回以上」、あるいは「時々」利用するという割合も、図2から明らかなように、最近の退職世代と言える60~74歳という前期高齢層で高いことがわかります。

図2：パソコンを使用する高齢者の年齢別の割合

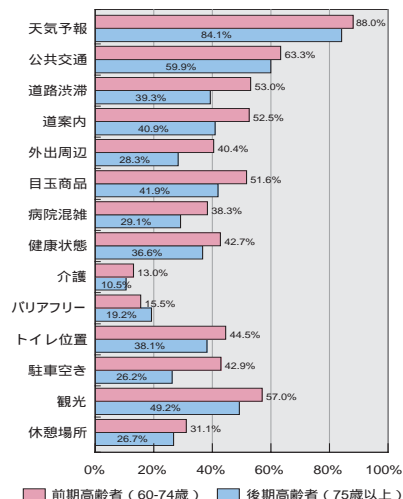


今後の高齢世代(現在の40~50歳代)のパソコン利用の状況から推して、パソコン利用者の高齢化が進むものと思われる。

これからの高齢者が欲しい外出情報は?

高齢者が生き生きと生活するためには外出することが重要と考え、ここでは休憩場所等を含む外出に関する14項目の情報内容のうちから「自分に役立つ情報」を選んでもらい、前期高齢者と後期高齢者に分けて集計した結果を示しています(図3)。約4割を超える高齢者が指摘した情報は、「天気予報」「公共交通」「道路の渋滞情報」「道路の道(経路)案内」「目玉商品」

図3：高齢者が自分に役立つ情報と回答した割合



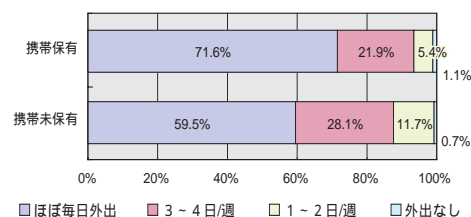
「自分の健康状態の情報(外出しても良い体調か?)」「トイレの情報」「観光」となっています。また、前期高齢者の指摘割合が後期高齢者のそれよりも10%程度高くなっている情報は、「道路の渋滞情報」「道路の道(経路)案内」「目玉商品」「駐車場の空き」

「観光」です。元気な方が多い前期高齢者は、後期高齢者と比較すると、介護やバリアフリーに関する情報よりも、積極的に外出して活動するための支援情報を求めていることがわかります。

ケータイの有無と外出頻度

携帯電話を保有する高齢者と保有しない高齢者に分けて外出頻度を集計した結果を示しています(図4)。携帯電話を保有する高齢者の方が保有しない高齢者と

図4：携帯保有と一週間の外出頻度



比べると、高い外出頻度を示しています。この結果は、運転免許を持って自動車運転する高齢者の方が、そうでない高齢者よりも外出割合が高いという交通分野の知見と符合しています。こうした外出活性の高さが、好奇心を持ち、携帯電話の保有につながり、さらに、自分の生活の活力も向上するといった良いサイクルを形成していると考えられます。生き生きした老後を考える意味では、積極的に外出すると健康長寿につながると考えられなくもないでしょう。

高齢化と情報化の今後の展望

高齢者の活力ある生活の中で、これらITの果たす役割は重要であることが今回の調査でわかりましたが、高齢者は携帯電話の電話機能のみを使っている人が多かったこともわかり、積極的に使用しているとは言えない状況にあると言えます。そのためにはボタンの形状や大きさといった使いにくさの克服や高齢者向けの使いやすい機能・デザインを考える必要があります。さらに、提供する側も正確で常に新しい情報を提供できる環境や高齢者が何を求めているかを知ることが大事になります。たとえば、自動車や歩行者のためのナビゲーションシステムに高齢者の体調や身体機能に応じた機能など高齢者特有の機能を付加することも必要です。

今回は元気な高齢者の外出に関わる情報を主体とした調査を実施しましたが、医療・福祉分野などでも高齢者のためのITは発展途上で、元気な高齢者から生活機能の低下した高齢者まで幅広い生活を支援する視点のITがこれまでも増して重要になるでしょう。これらを達成するためには、高齢者も積極的に関わることが非常に重要です。そのためには、高齢者ユーザーによる評価や高齢者は何が欲しいのかを言える土壌が今の所少ないように思えます。これからの高齢社会ではこのような事も重要になってくると思います。

国際百寿者研究会 in Hano Island

スウェーデンの孤島でわびさびに浸る 痴呆介入研究グループ 権藤 恭之

5月27日から6月1日にかけて南スウェーデンのHano島で開催された国際百寿者研究会に参加しました。この研究会は百寿者研究を行っている人達が意見交換をし、国際比較を進める目的で開催される研究会で1994年に始まり今回で7回目になります。私にとっては4回目の参加になります。今回は幾つか共同研究に関する同意もなされ実りある研究会でしたが、その紹介はまたの機会にして、今回の本題であるHano島見聞録に移りましょう。

Hano島は南スウェーデンのクリスチャンスカという町から程遠くないところにある約2km四方の小さな島です。港から定員50人ほどの連絡船に乗り約30分の距離にあります。別荘が多く定住人口は普段は100人あまり、シーズンでも200人ほどにしかならないそうです。島でお金を使うところは小さな雑貨屋と併設された客席20人ほどのレストラン1軒のみです。ホテルはなく、私たちが宿泊したのも6人定員の部屋が約10室、シャワーとトイレは共同というユースホテルでした。Hanoという名も知らぬ小さな島が会場に選ばれた理由は今回の研究会のホストであるルンド大学のハグバーク博士が退官を期に昨年から移り住んでいるからなのです。

こんな小さな島ですが、華々しく歴史の表舞台に登場していた時期もあります。ナポレオンが大陸封鎖令を発しイギリスと戦争状態にあった頃は、この島はあの有名なネルソン提督のイギリス海軍支配下にあり貿易の中継地点として栄えていたそうです。島には戦争で亡くなったイギリス兵の集団墓地があり、今でもイギリス海軍の追悼式典が開かれるそうです。島を案内してもらった時に、当時は海には100隻余りの船が浮かび、商店街やパン屋さんが立ち並んでいたとの説明を石ころが転がる野原で受けましたが、正に「つわものどもが夢の跡」と言う一節が当てはまる場所でした。最終日には早くから目が覚めたこともあり、前夜に仕入れたバナナを2本持ち、誰もいない島の裏側に一人で出かけました。昼間は糞でしかお目にかかることができないシカ達の



イギリス兵の墓

に、当時は海には100隻余りの船が浮かび、商店街やパン屋さんが立ち並んでいたとの説明を石ころが転がる野原で受けましたが、正に「つわものどもが夢の跡」と言う一節が当てはまる場所でした。最終日には早くから目が覚めたこともあり、前夜に仕入れたバナナを2本持ち、誰もいない島の裏側に一人で出かけました。昼間は糞でしかお目にかかることができないシカ達の



研究会の様子

群れとすれ違い、誰もいない岩場で海のきらめきを見ながら鳥のさえずりをBGMとしてバナナをほおぼ



ユースホテルと海

っていると、普段の自分の生活が味気ないものに思え情けなくなると同時に、東京を恋しく思う自分がそこにおりました。

トリビア@北欧

これから南スウェーデンに行かれる方に一言。今回は何も知らずに、ストックホルム経由で現地に行ったのだが、デンマークのコペンハーゲンから電車を使ったほうが効率がよかったかも知れない。世界地図を見てもデンマークとスカンジナビア半島は繋がっていないけれど、3年前に橋ができて繋がっていたことを私は知らなかったのだ。



研究推進への道標・平成15年度外部研究評価について

<平成15年度研究評価を実施>

東京都老人総合研究所（以下、老人研）では、病理学や生化学等の自然科学系研究領域と疫学や福祉学等の社会科学系研究領域に関して、研究グループ制のもとに経常的な研究を行うとともに、「老人性痴呆に関する総合的研究」「中年からの老化予防総合的長期追跡研究」の2つのテーマに関して、外部研究者も含めてグループを超えた学際的な長期プロジェクト研究を進めています。

これらの研究を適切に進行管理するため、老人研では、研究開始時にその目的や方法を中心にした研究計画の妥当性を、中間年で進捗状況を、最終年で期間を通じた研究成果と今後の方向性を審査・評価しています。また同時に、研究成果が論文発表や特許出願等を通じて十分に還元されているか、都民・都政への普及活動は活発に行われているか等、都の助成を受けて運営される研究所と

して果たすべき基本的な役割についても評価を行っています。

経常研究については、26研究グループが平成14年度から3年計画で開始しており、平成15年度はその中間評価が自然科学系（平成16年3月17日実施）と社会科学系（3月23日実施）に分けて行われました。また長期プロジェクト研究についても「老人性痴呆に関する研究」は平成11年度から10年計画で、「中年からの老化予防」は平成13年度から5年計画で行われているため、平成15年度はそれぞれ5年目、3年目の中間年にあたり、その中間評価が行われました（前者は平成16年2月6日、後者は2月19日に実施）。

評価に当たってはその公正性を期するため、4つの評価とも評価委員は外部委員とし、それぞれその分野の専門家、一般都民有識者、行政担当者の計4人をお願いしました。（外部評価委員一覧参照）

外部評価委員一覧

種別	外部評価委員		
	区分	氏名	役職
長期プロジェクト研究 「老人性痴呆に関する総合的研究」	学識経験者	田平 武	国立長寿医療研究センター長
	学識経験者	朝田 隆	筑波大学臨床精神医学教授
	一般都民有識者	笹森 貞子	呆け老人をかかえる家族の会 東京都支部代表
	行政関係者	岩井 令雄	東京都福祉局参事（施設調整担当）
長期プロジェクト研究 「中年からの老化予防総合的長期追跡研究」	学識経験者	辻 一郎	東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生学分野教授
	学識経験者	福生 吉裕	財団法人博慈会老人病研究所 所長
	一般都民有識者	南 砂	読売新聞編集局解説部次長
	行政関係者	清水 克則	東京都福祉局参事（団体改革担当）
グループ研究 自然科学系	学識経験者	後藤 左多良	東邦大学薬学部生化学教室教授
	学識経験者	高橋 信弘	東京農工大学農学部応用生物科学科教授
	一般都民有識者	野中 博	東京都医師会副会長
	行政関係者	中島 滋夫	東京都多摩老人医療センター事務局長
グループ研究 社会科学系	学識経験者	甲斐 一郎	東京大学大学院医学系研究科教授
	学識経験者	冷水 豊	上智大学文学部社会福祉学科教授
	一般都民有識者	川瀬 健介	東京商工会議所・検定事業部長
	行政関係者	清水 克則	東京都福祉局参事（団体改革担当）

<研究評価結果概要>

外部評価委員による評価結果の内容は、総論と各テーマ別の各論にまとめられています。紙面の都合上、各評価委員長によるそれぞれの評価総論を簡単に紹介します。



長期プロジェクト研究評価結果

「痴呆」プロジェクトでは、基礎研究班は痴呆成立のメカニズムの解明と脳機能低下の改善を目標としています。その中で糖鎖やグリア研究が独創的と評価されています。

ただし、一部痴呆に直結しない課題もみられることや、外部との共同研究も不十分との指摘もあり、今後研究計画を多少修正し目的達成を期待するというものです。

臨床研究班では、髄液マーカーやPET（陽電子放出断層撮影法）を用いた健常老人や初期痴呆患者の追跡調査及び、痴呆予防のための介入研究が高く評価されています。

「中年」プロジェクトでは、「お達者健診と介護予防プログラムの実施」が極めて高い評価を受け、『都民のための研究施設が形成されつつある』との賞賛を頂きました。

一方、「高齢者の社会参加の促進に関する研究」については、成果が見えていないため、今後実質的な成果を上げることが求めらるるとされています。

グループ研究評価結果

経常研究（グループ研究）について自然科学系は全般に良好であり、研究課題は継続されるべきであるとされています。しかし、グループによっては、テーマが重複していたり方法論がリスクなため、グループの再編や研究アプローチの再考を求める等の厳しい指摘もありました。

社会科学系は、全体に高い評価であり、15年度で終了する1グループを除き全課題の継続が



適切であるとされています。ただし、グループの中に異なった性格の課題が混在しているものが多いため、研究課題に基づいたグループ組替えが必要との指摘がなされています。

これらの評価結果については平成16年6月に報告書を関係諸機関に配布しました。

一方評価結果は、所の首脳部で構成される研究推進会議での議論を経て、平成16年度の研究グループの再編（26グループを19グループへ）や予算配分に反映しました。また、プロジェクト研究に関する評価結果は、研究期間後半の研究の方向性・内容に反映させて行きます。

（研究調整部 成果活用室）

カリフォルニアは広くて 砂漠の国でした

神経回路動態研究グループ 三浦正巳

昨年10月から6か月間、グループ研究のために留学する機会（海外休職）を与えられ、米国に行ってまいりました。どうしてわざわざ外国まで行ってと疑問を持つ方もいると思います。研究がある程度進んだところから、もっと発展させるためには、人間か道具か技術を変えるのが常道です。でも、新しい技術を最初から身につけるにはお金も時間もかかるので、道具も技術も揃った所で研究できたら好都合です。ちょっと虫のいい話に聞こえるかもしれませんが、受け入れる側にも新しい人と技術が来るといった利点があります。

私を受け入れてくれたのは、カリフォルニア州立大学、アーバイン校・神経生物行動学部（University of California, Irvine）の澄川勝美教授でした。ロサンゼルス南方80Kmに位置し、地元ではUCIと呼ばれ親しまれています。もともとは苅畑や放牧地だったそうで、およそ2Km四方の敷地に校舎が点在しています（写真1、木立の陰に建物があるのがわかりますか？、写真2）。ここに1万8000人の学生と1万



写真1：大学内の公園。大学が森の中にあるようです。しかし、少し離れると砂漠ばかりです。山火事もありました。

8000人の職員（教員は約4000人、うち教授900人）がいるのですが、広すぎてわかりません。昨年の入学志願者数は3万4000人で、全米5位だったそうです。毎年4800人入学し、4300人が卒業します。修士は500人、博士は150人、他に医学博士が90人です。近年、日本からも入学者がいるようです。

さて、私たち神経回路動態研究グループ（青崎敏彦グループリーダー）のテーマは、大脳基底核（図1）の働きを調べることです。脳のこの部分の障害でおこる代表的な疾患にパーキンソン病やハンチントン舞蹈病、歯状核赤核-淡蒼球ルイ体萎縮症などがあり、これらの神経変性疾患は中高年に多発します。病気は、生体が本来持っている機能が損なわれた状態といえます。そして神経の機能は、神経細胞同士が伝達物質をやり取りすることで発揮されています。大脳基底核で大事な伝達物質にアセチルコリンがあります。神経細胞は、アセチルコリン受容体という蛋白質で伝達物質を受け取ります。不思議ですが、人間が持っていない物質も受容体にくっつくのです。蛇やカエル、貝などが持つ毒の多くは、勝手に受容体にくっついて相手を動けなくする（機能を乱す）物質です。タバコの葉に含まれるニコチンもアセチルコリン受容体にくっつきます。私たちは神経の機能を調べるために、一個の神経細胞とニコチンの反応を、パッチクランプ法という手法で詳しく調べてきました。これが病気の研究になるでしょうか？ なるかもしれません。何故なら薬も毒と同じように、受容体に結合して働く物質が多いからです。

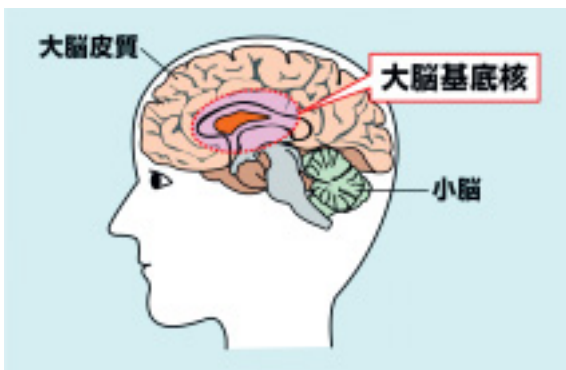


図1：大脳基底核は、大脳皮質の深部にあります。主に運動、筋緊張や姿勢の調節をしています。さらに過去の成功体験による動作や行動プランの選択、習慣形成、皮質下痴呆、薬物中毒にも関係しています。ハタネズミでは、結婚や恋愛などの社会的行動に関わるともいわれてきました。こうした機能の多くは、環境の働きかけによって細胞に遺伝子翻訳が誘導されることが必要です。体の細胞は、生まれた時から同じ一揃いの遺伝子を持っていますが、それぞれの細胞で働いている遺伝子は違うので、最終的には細胞レベルで調べるのが大事になると考えています。

一方、私の行ったUCIの澄川研究室では、特別な方法でニコチンを投与すると神経細胞に誘導される遺伝子を、DNAマイクロアレイ法で探してきました。最近、in situ ハイブリダイゼーション法で、どの種類の細胞でその遺伝子が働いているかを調べています。私の仕事は、一個の神経細胞の機能がニコチンでどう変化したか調べることでした(写真3)。そこで、ニコチンが脳基底核でも神経細胞の機能を変えることを見つけた時は、事前に予想をしていたとはいえ、仕事が結びついたと喜びました。

以前から、喫煙とパーキンソン病の罹患率は逆相関することが知られていました。ある種類の神経細胞はニコチンが結合する受容体をたくさん持っています。ニコチンはアセチルコリンより分解されにくいので長く体内にとどまり、アセチルコリン受容体に結合して神経細胞を刺激します。この受容体は、脳では痴呆や脳機能改善薬の、脊髄では鎮痛薬のターゲットになっていて、今後の発展が期待されています。

留学はグループ研究の発展のためでしたが、そればかりでなく多くのことを学ばせていただきました。



写真2：砂漠に生えるジョシュアツリーと呼ばれる珍しい植物。両手を上げた人の姿に似た形が特徴です。私たちの想像する砂だらけの砂漠とはちょっと違いますね。

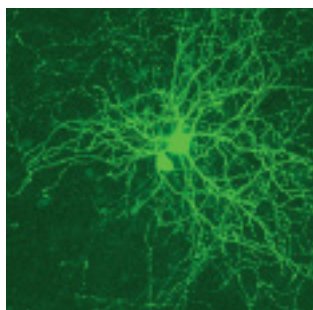


写真3：大脳基底核の神経細胞を蛍光抗体法で染め、共焦点レーザー顕微鏡で観察しました。Fast-spiking neuron という細胞が2個染まっています。長くのびた突起は、木の枝になぞらえて樹状突起と呼ばれています。この枝に多くの受容体があって、信号をやり取りしています。



日本基礎老化学会第27回大会
若手奨励賞の受賞

分子老化研究グループ 清水孝彦

「Estrogen and insulin signaling regulate resistance to oxidative stress in mice」という研究課題で若手奨励賞を受賞しました。

本研究は、マウスにおいてインスリン受容体を介したシグナルが長寿命に密接に関連している酸化ストレス耐性を制御していること、またその制御には性ホルモンが関与していることを明らかにしたものです。本研究を進展させることで、哺乳類における寿命制御のメカニズムと性差の謎に迫れると期待しています。



平成15年度東京都医師会医学研究賞を受賞して

ポジトロン医学研究施設 非常勤研究員 鈴木正彦

我が国では、アルツハイマー病(AD)やレビー小体型痴呆(DLB)に代表される痴呆疾患やパーキンソン病(PD)などが近年増加しており、これらの疾患の早期鑑別診断は患者への対応を適正に進める上で非常に重要です。これまで進行性核上性麻痺やハンチントン舞蹈病、ADやDLBの様々な神経変性パターンを報告してきましたが、現在はこうした知見に基づきPDやDLBに関しての検討をPETを用いて進めています。結果の一部を第26回日本脳神経CI学会総会や第3回Parkinson's Disease Forumにて発表しましたが、こうした一連の研究が評価され受賞に至ったと思います。(東京慈恵会医科大学神経内科)

介護予防緊急対策室 最近の活動

- 7月28日 第1回「介護予防とボウリング研究会」講演
- 8月 3日 北区訪問保健指導員研修会講演
- 8月 5日 担当者・実践指導者対象 尿失禁予防プログラム研修
- 8月25日 担当者・実践指導者対象 老研式転倒予防プログラム研修
- 8月27日 武蔵野市民生児童委員協議会全体研修会講演
- 8月31日 滋賀県介護予防指導者養成研修会講演
- 9月 2日 葛飾区高齢者クラブ連合会講演
- 9月 6日 江戸川区地域ミニディサービス交流研究会講演
- 9月10日 和歌山県「喜の国トップセミナー」講演

平成16年度 文部科学省 科学研究費補助金の採択状況（追加）

研究種目	氏名	所属研究グループ	研究課題	交付決定額 単位(千円)
特定領域(2)	権藤恭之	痴呆介入	後期高齢者の機器、環境情報の利用実態および心理的障壁の解明とその対策の検討	2,100

平成16年度 文部科学省 科学研究費補助金の採択状況（分担研究分）

研究種目	氏名	所属研究グループ	研究課題	交付決定額 単位(千円)
基盤研究(A)(1) (京都大学)	西澤哲	疫学・福祉・政策	ヒトを含む霊長類におけるロコモーションの発達、加齢	710
基盤研究(B)(1) (京都大学)	清水孝彦	分子老化	アミロイド凝集体の固体NMRによる立体構造解析	1,500
基盤研究(B)(1) (群馬大学)	岩下淑子	生体膜機能	アルツハイマー病脳 アミロイド沈着と脂質ラフトの神経病理学	1,000

平成16年度 厚生労働科学研究費補助金

研究種目	氏名	所属研究グループ	研究課題	交付決定額 単位(千円)
政策科学推進研究事業				
主任研究者	新開省二	地域保健	介護予防対策の費用対効果に着目した経済的評価に関する研究	4,700
分担研究者	藤原佳典	地域保健		0
長寿科学総合研究事業				
主任研究者	村山繁雄	老化臨床神経科学	軽度認知障害の前方視的・後方視的研究	5,445
分担研究者	石井賢二	ポジトロン医学		720
分担研究者	権藤恭之	痴呆介入	介護予防対策サービスの新技術開発とシステム構築に関する研究	1,700
主任研究者	遠藤玉夫	糖蛋白質	老化に伴うカルパイン活性制御不全の機構解明	4,900
主任研究者	白澤卓二	分子老化	高齢者疾患病理における遺伝素因の解明	18,000
主任研究者	高橋龍太郎	介護・生活基盤	脳卒中患者の失認・失行と生活障害に関する研究	1,623
主任研究者	吉田英世	疫学・福祉・政策	寝たきり予防を目的とした老年症候群発生予防の検診「お達者健診」の実施と評価に関する研究	17,861
分担研究者	金憲経	疫学・福祉・政策		0
	古名丈人	疫学・福祉・政策		0
	杉浦美穂	疫学・福祉・政策		0

研究種目	氏名	所属研究グループ	研究課題	交付決定額 単位(千円)
分担研究者	吉田 祐子	疫学・福祉・政策	寝たきり予防を目的とした老年症候群発生 予防の検診「お達者健診」の実施と評価に 関する研究	0
	新名 正弥	疫学・福祉・政策		0
	権藤 恭之	痴呆介入		0
主任研究者	大淵 修一	介護予防緊急対策室	介護予防筋力トレーニングの効果の検討	15,540
分担研究者	古名 丈人	地域保健		0
分担研究者	熊谷 修	地域保健	虚弱高齢者の自立度と身体活動及び栄養の関 係に関する実践研究	3,500
分担研究者	高橋 龍太郎	介護・生活基盤	高齢者の終末期ケアを支える地域ケアシス テムの構築に関する研究	*
主任研究者	新開 省二	地域保健	高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向け た介入事業の展開とその評価	9,500
分担研究者	藤原 佳典	地域保健		0
	辰巳 格	言語・認知・脳機能		1,500
痴呆介入研究事業				
分担研究者	矢富 直美	痴呆介入	痴呆性疾患の介入予防に関する研究	2,700
痴呆・骨折臨床事業				
主任研究者	石神 昭人	加齢臓器障害	アルツハイマー病の早期診断、治療戦略 の開発	6,500
分担研究者	半田 節子	加齢臓器障害		0
	久保 幸穂	加齢臓器障害		0
ヒトゲノム・再生医療等				
分担研究者	木村 成道	遺伝子情報	生命科学研究資源基盤としての培養細胞 株の収集・保存・供給システムの整備に 関する研究	5,000
こころの健康科学研究事業				
分担研究者	遠藤 玉夫	糖蛋白質	-dystroglycanのO-mannose型糖鎖と 細胞外matrix結合に異常をきたす先天性筋 ジストロフィーの病態解明と治療法の開発	12,750
がん予防等健康科学総合				
分担研究者	水野 正一	疫学・福祉・政策	がん予防対策のためのがん罹患・死亡動向 の実態把握の研究	1,000
合計				112,939

*主任研究者一括管理

入場無料

老年学公開講座

第78回

日時：平成16年10月28日(木)
13:15～16:30
場所：江戸東京博物館ホール
(定員450名)

「知らなかった! 筋肉の不思議
中高年からの暮らしに活かす筋トレ」

共催：墨田区

第79回

日時：平成16年11月15日(月)
13:15～16:30
場所：北とぴあ さくらホール
(定員1,300名)

「めざせ介護予防!
健康で自立した老いの秘訣(仮)」

共催：北区

介護予防講演会

日時：10月22日(金)13:15～16:30
場所：豊島区公会堂(定員800人)
「地域ですすめる介護予防大作戦!」
共催：豊島区

特別公開講座

日時：11月8日(月)13:00～16:30
場所：文京区シビックセンター(定員1,802人)
「三浦家の長寿の秘密を探る 介護予防にむけて」
共催：文京区

事前申し込み不要

*手話通訳を同時に行います

主なマスコミ報道

(H.16.4.20～H.16.8.25)

分子老化研究グループリーダー 白澤 卓二

「高齢者医療 120歳を超える長寿の世紀 医療は疾病予防が中心に」(「最新医療経営」 H.16.4.20 5月号)

疫学・福祉・政策研究グループ 副所長 鈴木 隆雄

「どう変わる介護保険 上 予防メニュー集約的に」
(毎日新聞 H.16.5.25)
「日本の長寿の秘訣」(英国新聞ザ・ガーディアン)
「定年後の人間ドック おたっしや健診について」
(BSジャパンプラス1 H.16.7.10)

介護予防緊急対策室 室長 大淵 修一

「介護予防「達人」で暮らすには」
(東京新聞社説 H.16.6.8)
「「介護要注意」自分で発見」(毎日新聞 H.16.7.8)
(お達人21健診について)
(大阪毎日放送「ちちんぷいぷい」H.16.7.8)
「要介護に至らぬように 予防健診で老化度チェック」
(北海道新聞 H.16.7.11)
「介護のゆくえ 高齢者の筋トレ広がる」(山陽新聞 H.16.7.21)
「介護予防 高齢者に「筋トレ」推奨」(読売新聞 H.16.7.21)
「健康日本21 元気でいきいき、自立した人生を! 「介護予防」という考え方」(「へるすあっぷ21」8月号)

「「介護予防」の効果を実証し利用者への説明責任をとる」
(「月刊介護ビジョン」8月号)

介護予防緊急対策室 室長 大淵 修一・西澤 哲
「未来志向研究プロジェクト」を通じて見えた介護の未来予想図」(「Visionと戦略」 H.16 8月号)

介護・生活基盤研究グループリーダー 高橋 龍太郎

「心配!お年寄りの低栄養」(毎日新聞生活家庭欄 H.16.6.18)
「猛暑 室温管理 脱水症状 気をつけて」
(読売新聞 H.16.7.25)
「体内の水分量が少ないこと、のどの渇きが鈍いこと、体の不自由さ、などの原因の指摘、水分補給の工夫」
(テレビ朝日スーパーモーニング H.16.8.12)

言語・認知・脳機能研究グループリーダー 辰巳 格

「なぜなぜ科学 音読で脳が活性化するのは?」
(毎日新聞 H.16.6.19)

痴呆介入研究グループリーダー 本間 昭

「私の視点 痴呆症 逃げずに向きあう心構えを」
(朝日新聞 H.16.7.27)

痴呆介入研究グループ 権藤 恭之

「百寿者研究の成果から学ぶ 1 元気な高齢期の迎え方」
(公明新聞 H.16.8.3)

運動・自律機能相関研究グループリーダー 堀田 晴美

「日常で出来るボケ防止法は、市街地散歩と咀嚼にあった。」
(「ターザン」425号 H.16.8.25)

異動

8月1日付

転入 中村 憲司

新事務局長

中央図書館管理部長より

転出 内海 憲二

前事務局長

心身障害者福祉センター所長へ

編集後記

平成16年8月1日、東京都は福祉局と健康局を統合し、福祉保健局を設置しました!! その理由は、「少子高齢化社会に対応し、健康に対する都民の皆さんの不安を払拭するため」だそうです。研究所も来年度からスタートするコア研究体制の整備に向け、研究グループの統廃合が加速するでしょう。「少子高齢化社会に対応し、研究体制が整備され、都民や所員の不安を払拭する」ことを切望します。(さまよえるラクダ)



平成16年9月発行

編集・発行：(財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所 広報委員会内「老人研情報」編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241(内線3151) Fax. 03-3579-4776

印刷：シンソー印刷 株式会社

ホームページアドレス：http://www.tmig.or.jp



古紙配合率100%再生紙を使用しています